

小諸市郷土遺跡出土の縄文早期末葉土器群

贅田 明

I はじめに	IV 早期末葉～前期初頭土器群の様相
II 郷土遺跡の様相	V 小結
III 出土土器群の検討	

I はじめに

当センターが発掘調査を実施した小諸市郷土遺跡の報告書が刊行され（桜井他2000）、その成果が明らかとなった。郷土遺跡の主体は縄文中期後葉で、膨大な遺構・遺物が検出され、浅間山麓における当該期の良好かつ重要な資料が蓄積されるに至った。また、主体とはならないものの縄文施文尖底土器群が検出されており、これ等は縄文早期末葉～前期初頭土器群を理解する上で重要な資料と認識される。

筆者は縄文施文尖底土器群の事実記載を担当したが、様々な制約や諸事情から考察を行えなかった。その為、紀要の紙幅を借りて縄文施文尖底土器群の考察を行ない、併せて早期末葉～前期初頭土器群の様相を把握する。

II 郷土遺跡の様相

(1) 出土土器群の分類

縄文施文尖底土器群は9・27・36・61号竪穴住居跡、61・63・1162・1182号土坑出土の遺構資料と他に遺構外資料が存在するが、ここでは良好な36号竪穴住居跡、61・63号土坑出土資料及び遺構外資料に注目する。縄文施文尖底土器群の検討にあたり、まずは以下の様に分類を行う。

- A類：口縁部に絡条体圧痕文を施す一群
- B類：口縁部に隆帯を貼付する一群
- C類：口縁部に沈線で文様を描く一群
- D類：縄文施文のみの一群
- E類：撚糸文施文のみの一群
- F類：無文の可能性のある一群

この内、D・E類は器面全面に縄文・撚糸文を施文する一群と、A～C類の胴・底部破片を含む。また、F類は全体を知り得る資料が存在せず、果たして無文土器なのか不明確な点が残る。後述の通り、D類の底部に縄文施文が及ばない無文部が見受けられ、F類がその無文部である事も考えられるからである。更に、C類には縄文・撚糸文の地文がない例が存在し、こう

した例の破片となる事もある。故にF類は、可能性がある一群として捉えておきたい。

(2) 遺構出土資料 (第1・2図)

○第36号竪穴住居跡 (1～5)

C～E類が出土した。1・2はD類の胴部で、1は縄文LRの横位斜構成、2は縄文LR・RLによる横位羽状構成となる。1には更に円形刺突が施されるが、その原体は不明である。3・4はE類の胴部で、3は横・斜位方向、4は縦・斜位方向の施文を行い、4は縦長の菱形を構成した可能性もある。内面はいずれもナデ調整で、条痕は認められない。

5はC類の良好な資料である。器形は平縁を呈し、胴部が直線的な立ち上がりを見せ、口唇部附近で外反する。撚糸文を地文としながら口縁部へ、2条1対の沈線で文様を描く。モチーフは上端に緩やかな弧状沈線を描き、器面を縦位分割してそれぞれにX字状の文様を配置し、その中央には横位の短沈線を加える。下端は上端より短い、弧状沈線を添えている。内面はナデ調整で、口唇部直下に外面と同一の撚糸文を施文する。

○第61号土坑 (6～12)

いずれもD類である。6～10は胴部で、6～9は縄文LR・RLの横位羽状構成となり、10は単節による縦条の縄文を施文する。11・12は底部である。11は単節による縦条の縄文、12は縄文LRの横位斜構成であり、12の一部に無文部が見受けられる。内面は条痕を有するものがなく、いずれもナデ調整が施される。

○第63号土坑 (13～22)

D類の口縁部・胴部が出土している。13～15は平縁で、13・14は直立気味の、15は外反した口唇部を呈する。縄文は13がRLの横位斜構成、14・15は横位羽状構成で、13は口唇部に刺突を行った可能性がある。16～22は胴部で、22は胴下部から底部附近であろう。16・22は縄文LR、20・21は縄文RLの横位斜構成、17～19は縄文LR・RLの横位羽状構成となり、17・18は菱形を構成する部分が認められる。内面はいずれもナデ調整が施され、条痕はない。

(3) 遺構外出土資料 (第2～5図)

○A類 (23)

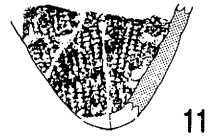
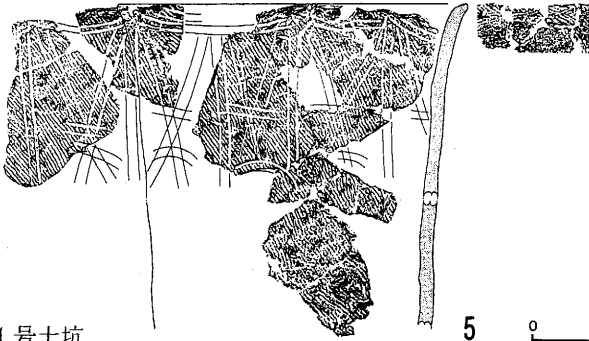
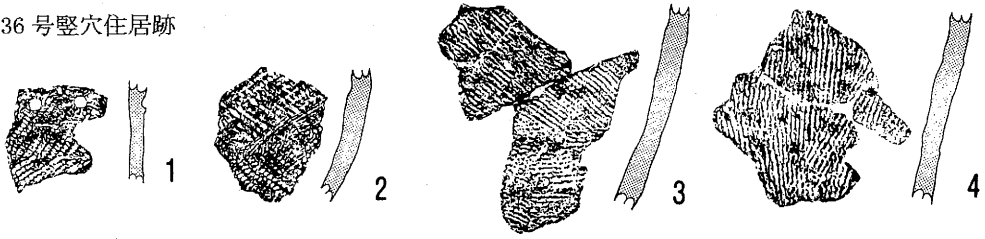
23は口縁部で、縄文RLの地文上に3条以上となる、横位多段の絡条体圧痕文を施文する。内面はナデ調整がなされており、条痕は認められない。

○B類 (24～39)

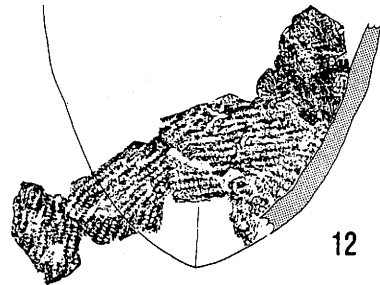
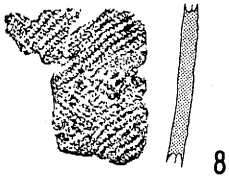
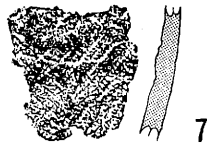
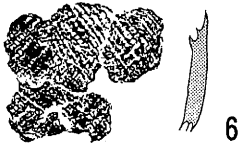
波状口縁の波頂部から垂下隆帯を貼付する一群と、平縁で1条の水平隆帯を貼付する一群が存在する。前者は24の1点のみで、垂下隆帯上に1条の沈線を描いている。隆帯脇には縄文Lを施文し、口唇部には刻みを持つと思われるが不鮮明である。波状口縁の形態は波頂部が丸みを帯び、C類の波状口縁に類似する。

後者は28・31～33・35・36の様に、隆帯の脇を沈線でなぞるものがある。隆帯上を25・33・34・36・37・39は縦または斜め方向に刻み、それ以外は27～29・31・32・35が無文で、26・30・38は縄文施文が一部かかる。隆帯の刻みは絡条体以外の工具によるものと思われ、絡条体で刻むものは明確でない。隆帯は26の極めて低く微かな隆起を有するのみのもの、27・28等の細

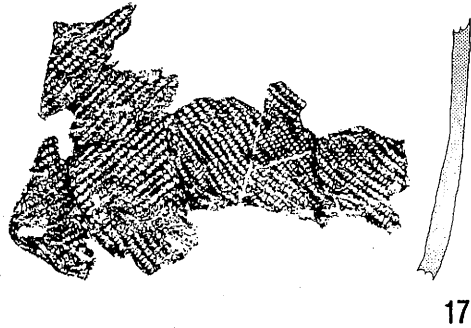
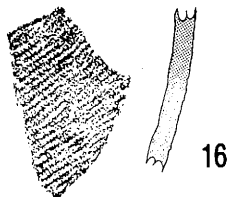
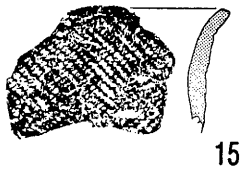
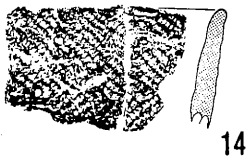
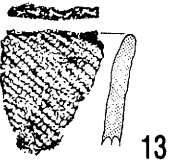
36 号竪穴住居跡



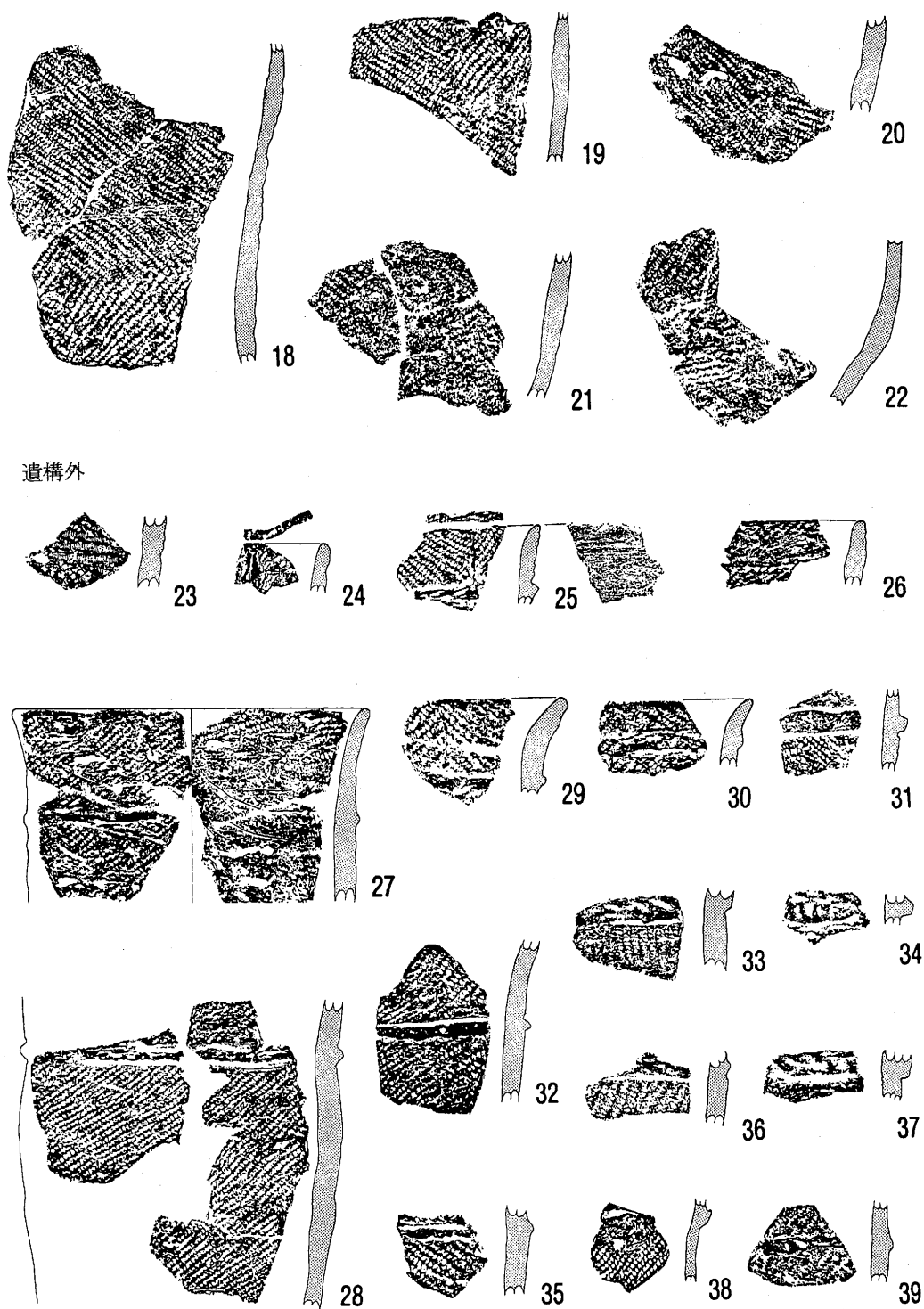
61 号土坑



63 号土坑



第 I 図 郷土遺跡出土土器群(I)



第2図 郷土遺跡出土土器群(2)

身を呈するもの、33・37の幅広等、多様である。縄文は25・26・29・31がLR・RLによる横位羽状構成、27・28・32・36・38・39がLRによる横位斜構成、30・35がRLによる横位斜構成、33が縦条の縄文をそれぞれ施文する。25は口唇部、27は内面の口唇部直下へ施文が及ぶ。内面は横方向の条痕が認められる25を除き、ナデ調整が施される。

○C類 (40～52)

平縁と42・43・45の緩やかな波状口縁が存在し、40・43は口唇部に刻みを施す。小破片で不明確だが、第1図5の様に隆帯を持たず幅広の口縁部文様帯を形成する例と、52の様に水平隆帯より上位に口縁部文様帯を形成する例があり、52以外は前者であると推測される。

また、前者と後者では地文の有無で異なり、前者は縄文あるいは撚糸文地文上に弧状・平行・菱形等の、後者は地文を持たず鋸歯状・平行等の文様を沈線で描くが、沈線は1本の場合と2本1対の場合が認められる。沈線の地文は40・41・44・46・47が縄文LRの横位施文、42・43は縄文RLの横位施文、48～51は撚糸文で、45は不明確である。内面は条痕を有する例はなく、ナデ調整が施される。

○D類 (53～95)

縄文は全て単節で、施文構成は53・55・59・61・63～68・70・72・73・75～79・86・87が縄文LRあるいはRLの横位斜構成、54・56～58・60・62・69・71・74が縄文LR・RLによる横位羽状構成、80～85・88・89が縦条の縄文で、83～85・88・89は同一個体の可能性が高い。

53～58は口縁部で平縁と54の波状口縁が存在し、個体差はあるが全て口唇部が外反する。54は4単位以上と考えられるが、正確な単位数は不明である。55・56・58は口唇部を刻むが、その原体は不明。95の底部には、縄文施文が及ばない無文部が看取され、61号土坑の12と共通する。内面は55・64・65に横または斜め方向の弱い条痕調整、58・61・83～85・88・89に横方向の擦痕状調整が観察され、その他はナデ調整である。

○E類 (96～119)

撚糸文は密接で、縦位・斜位・横位方向に回転施文される。RとL等を組み合わせた2本組の原体や撚糸側面圧痕文は存在しない。96・97は同一個体で、波状口縁を呈し、口縁部と同様の原体で口唇部にも施文を行なっている。内面はナデ調整だが、101は横方向の条痕調整が施される。

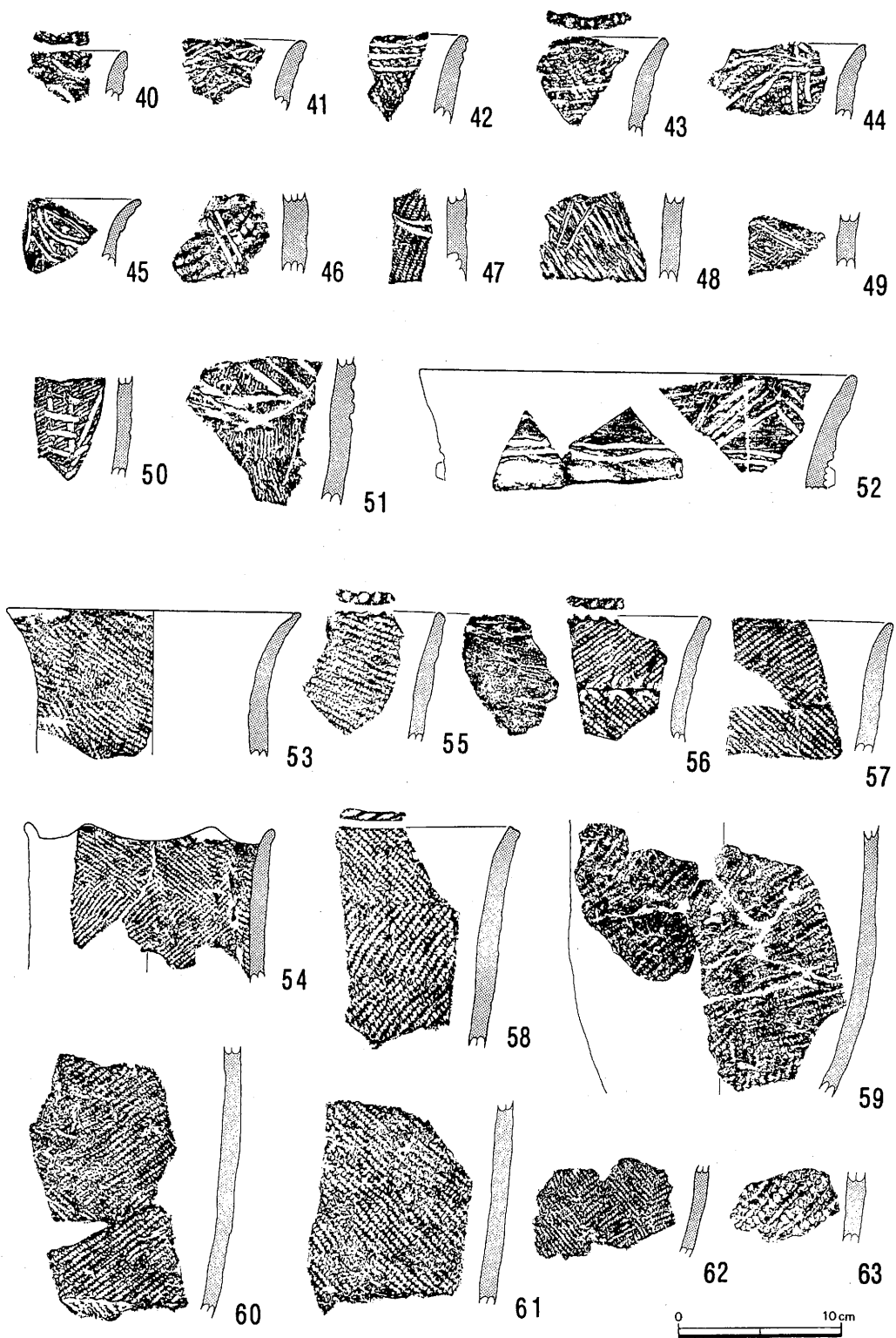
○F類 (120～124)

器面の内外にはナデ調整が施されるが、120の内面には弱い条痕調整が認められる。

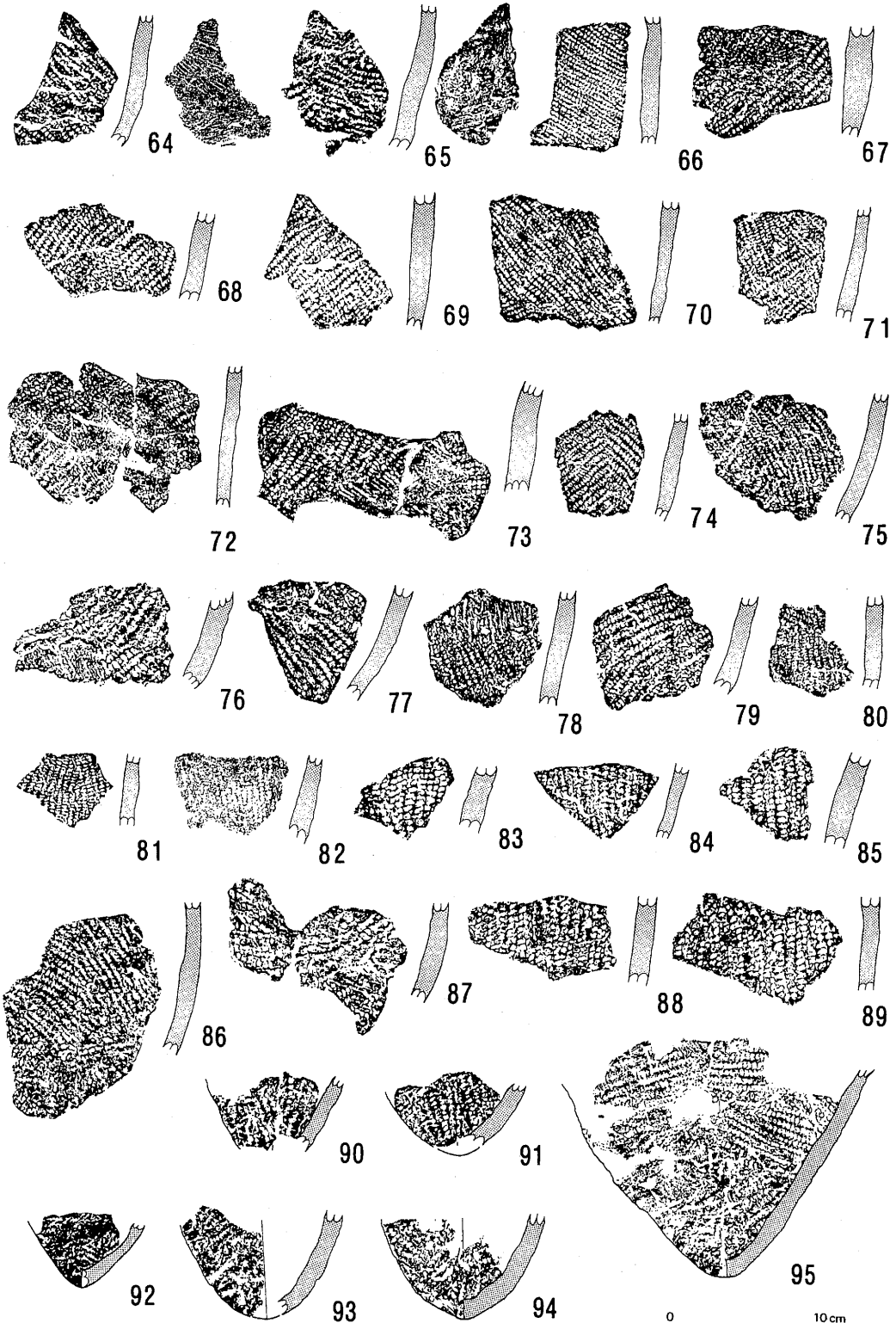
III 出土土器群の検討

(1) 編年的位置

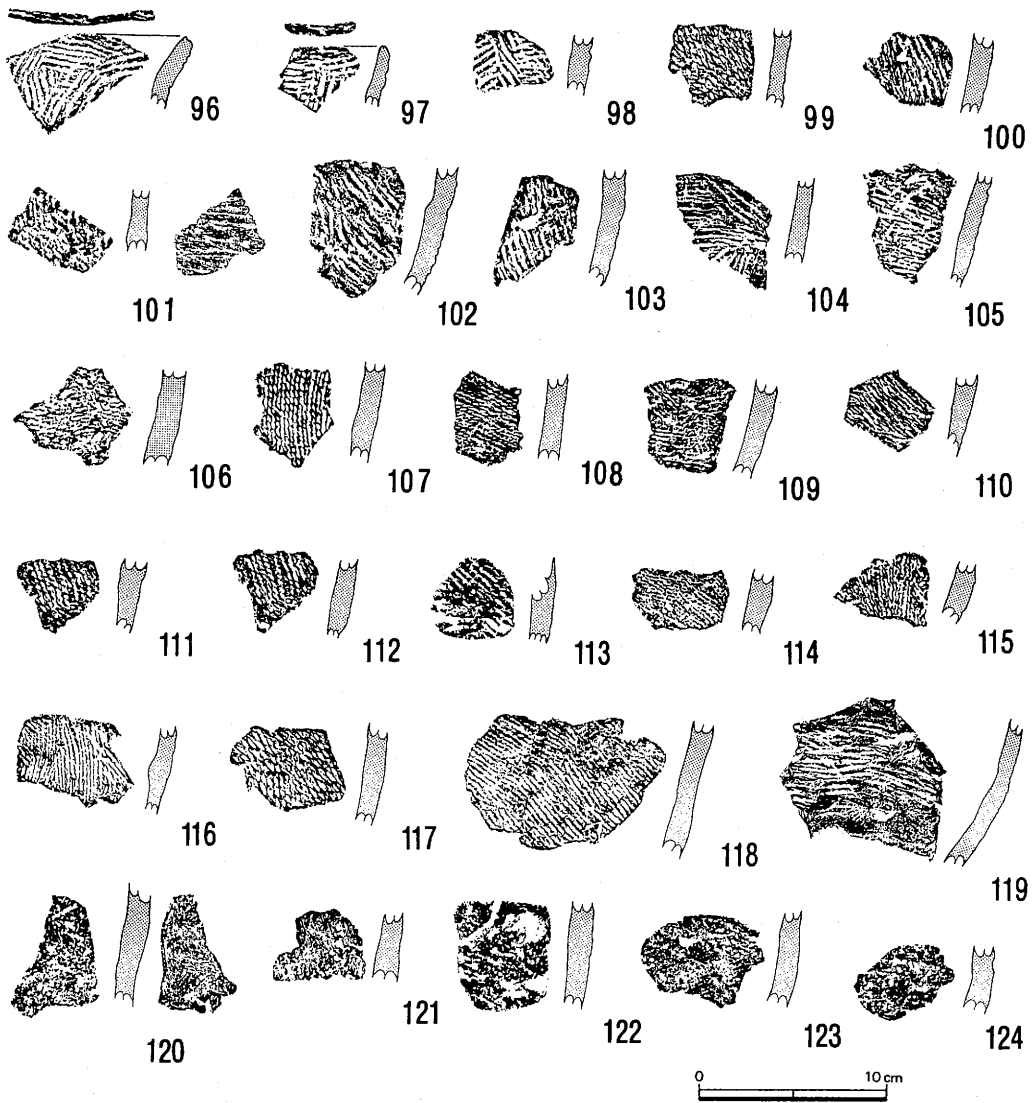
A～F類の出土状況は、決して良好と言えるものではない。遺構外資料の出土状況に特筆すべき傾向はなく、また、遺構出土資料も36号竪穴住居跡でC・D・E類が供伴するが、61・63号土坑はD類のみで他類との関係は不明確である。しかしながら、前後する時期の土器が存在せず、更にA～C類の地文とD・E類の間には原体や施文手法・構成等に共通性が窺われ、胎



第3図 郷土遺跡出土土器群(3)



第4図 郷土遺跡出土土器群(4)



第5図 郷土遺跡出土土器群(5)

土も非常に類似する点等から、A～E類は同時期でそこにF類が伴う可能性が高い。つまり、郷土遺跡の縄文施文尖底土器群は、口縁部に絡条体圧痕文・隆帯・沈線を施す一群、縄文・撚糸文施文の一群で構成され、無文の一群が加わる可能性がある一括性の高い資料だと言える。

この構成は、当地域における縄文早期末葉～前期初頭の様相を把握する上で重要である。A・C類の存在は、郷土遺跡出土土器群と早期末葉絡条体圧痕文土器群及びそれに供伴する土器群との関連性を窺わせ、かつこの組み合わせが早期末葉の一樣相を示す事が推測される。その一方で、B類は前期初頭塚田式の口縁部に貼付される隆帯、D・E類は前期初頭の縄文・撚糸文との関係が注目され、塚田式への変遷過程が問題になろう。

郷土遺跡出土土器群の傾向として、A～D類の縄文施文が相当量を数える点が指摘される。E類の撚糸文も一定量を占めてはいるが、縄文はその量を遙かに超え、A～C類の地文となる他、D類は施文が器面全面に及ぶ。縄文・撚糸文施文は早期末葉土器群の中で、編年の位置を判断する為の基準になる。縄文施文が確実に認められるのは絡条体圧痕文土器群のうち、茅山下層～上層式併行期及び石山～天神山式併行期なのだが（中沢・賛田1996）（中沢1997）（綿田1996・2000）、その狭間の入海Ⅱ～石山式併行期は岡谷市膳棚B遺跡1号住居址（百瀬1988）を見る限り、撚糸文地文の絡条体圧痕文に縄文施文が1点も伴出しないので、双方を系統的に繋ぐ事はできない。茅山下層～上層式併行の縄文は、野島式併行の古屋敷遺跡早期IV群土器（阿部1990）・鶴ヶ島台式に組成する縄文施文の土器に系譜が求められ、一方の石山～天神山式併行の縄文は、東北地方で成立していた縄文条痕土器群との関係を重視する必要がある（中沢・賛田1996）。現段階では、双方の縄文施文を別系統と捉えておくのが無難であろう。

郷土遺跡の縄文施文はどちらか一方の時期に所属するはずだが、A類の縄文を地文とする絡条体圧痕文は小破片で1点の出土に止まり、文様構成等による絡条体圧痕文を根拠とした時期の検討の位置付けは明確さに欠ける。そこで、A～E類の地文及び器面調整に注目したい。絡条体圧痕文土器群の変遷における器面調整・地文の傾向は、内外両面絡条体条痕・少数の貝殻条痕（茅山下層～入海Ⅱ式以前）→撚糸文の盛行（入海Ⅱ～石山式併行期）→縄文地文の出現（石山～天神山式併行期）といった変遷の方向性が指摘されている（綿田2000）。郷土遺跡では全体的な傾向として、貝殻条痕や内外両面に絡条体の条痕調整を持つ土器が存在せず、撚糸文が顕著でそれ以上に縄文施文が発達し、縄文施文手法に前期初頭土器群との共通性が見出せる。更に膳棚B遺跡で縄文施文が存在しない状況を鑑みれば、郷土遺跡出土土器群は石山～天神山式併行期とするのが妥当であろう。なお、撚糸文の発生については、絡条体を引きずる絡条体条痕→回転施文の撚糸文へ変化するとの仮説が一般的である。

（2）石山～天神山式併行期の様相

石山～天神山式併行期の土器群は、岡谷市梨久保遺跡（小沢1986）・松本市坪ノ内遺跡（島田1990）・御代田町塚田遺跡（下平・賛田b1994）・同戻場遺跡（中沢・賛田1996）・同川原田遺跡（中沢1997）等に良好な資料が見受けられる。郷土遺跡出土土器群を既出資料と比較する為、各遺跡の状況を簡単に概観しておく。

○梨久保遺跡23号住居址（第6図）

a・b 2軒の住居の切り合いが指摘され、撚糸文地文の絡条体圧痕文（1）が出土した23号aを、縄文施文（2）・逆T字状隆帯を貼付する土器（3）が出土した23号bが切る。双方の混じりとする土器群には、絡条体条痕（4・5）・撚糸文地文の絡条体圧痕文（6～8）・撚糸文（9～13）・隆帯貼付の土器（14～18）・縄文（19～25）・隆帯を貼付する無文土器（26～28）が存在し、更に東海系土器群の石山式（31・32）・天神山式（33・34）が出土している。次の75号住居址下層や坪ノ内遺跡の状況を見る限り、23号a・b出土土器群は型式的に明確に分離できず、a・bの切り合いは極めて短期間の所産と理解される。

○梨久保遺跡75号住居址（第7図）

出土土器が覆土の上下層に分れ、下層には絡条体条痕（1・2）・捺糸文地文の絡条体圧痕文（3～15）・捺糸文（16～21）・隆帯貼付の土器（22・26）・縄文（25・30・31）・捺糸側面圧痕文（27）及び東海系の石山式（23・24）・天神山式（28・29）が、上層には捺糸文（32・33）・隆帯貼付の土器（34～37）・隆帯貼付の無文土器（38）が認められる。

下層は23号住居址と類似するが、捺糸側面圧痕文の存在が気に掛かる。絡条体圧痕文と捺糸側面圧痕文の、明確な供伴事例はない。これについて、金子直行氏が第13回縄文セミナー「早期後半の再検討」の席上で、「捺糸側面圧痕文を上層の土器と考え、上層の捺糸文・隆帯貼付の縄文施文土器と併せて前期初頭塚田式と理解したい」といった内容の発言をされたが（金子2000）、筆者もこの意見に同意したい。当地域では、捺糸側面圧痕文の出現を前期初頭と考え、絡条体圧痕文とは時期差を介在させる。由に、下層を石山～天神山式併行、上層の捺糸文・隆帯貼付の縄文施文に捺糸側面圧痕文を含めて前期初頭塚田式併行とする。

○坪ノ内遺跡（第8図）

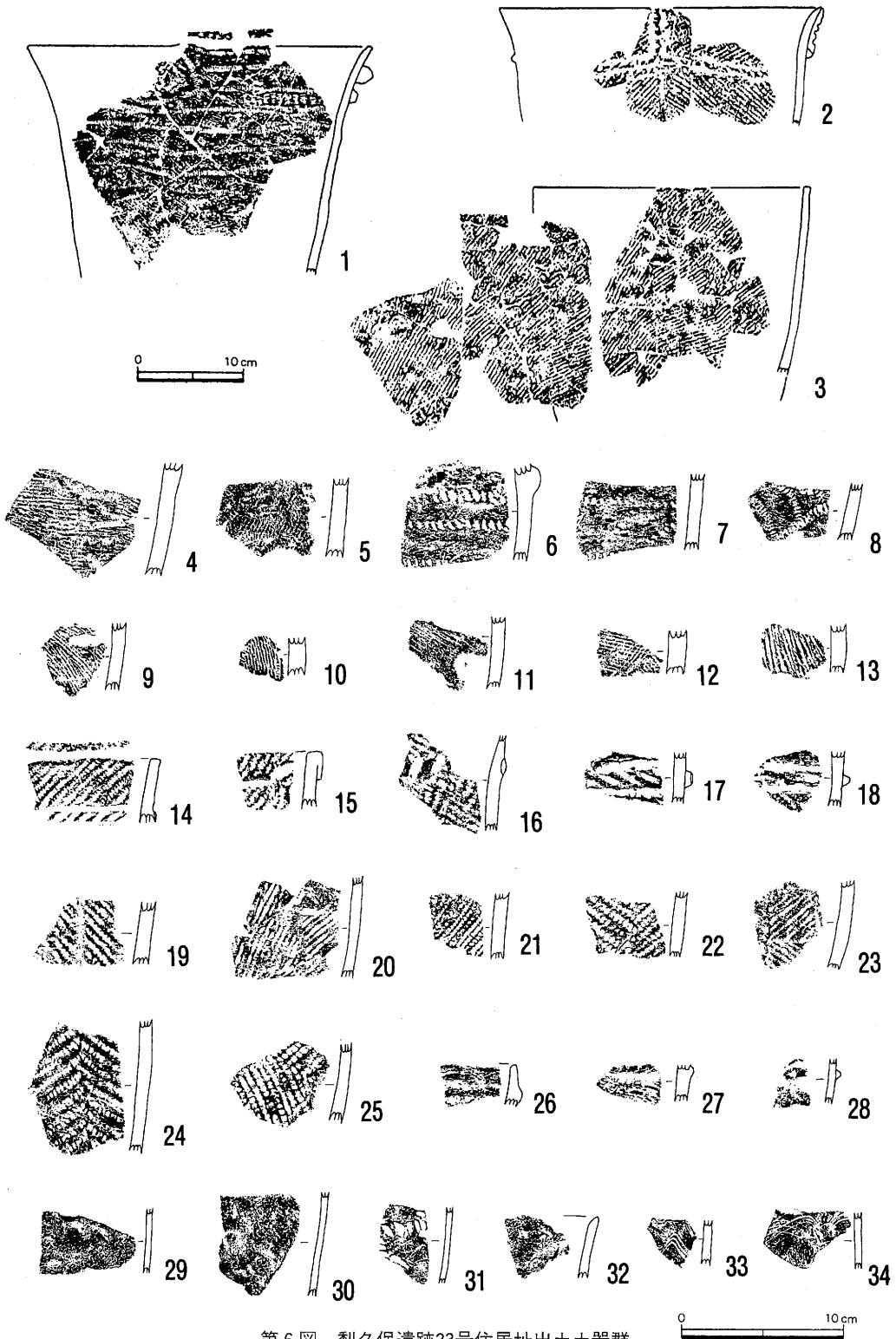
土器集中区で、異原体による横位羽状縄文の他に、捺糸文地文の絡条体圧痕文（1～12）・工具の刻みまたは絡条体の押捺を加えた隆帯貼付の土器（13～22）・縦条の縄文（23）・捺糸文（24～27）が出土している。隆帯貼付の土器には、隆帯の脇を沈線でなぞる例がある（20）。これに入海Ⅱ式（28）・石山式（29～31）・天神山式（32～35）の東海系土器群が供伴するが、その主体は石山式・天神山式である。

○御代田町塚田遺跡・川原田遺跡・戻場遺跡（第9・11図）

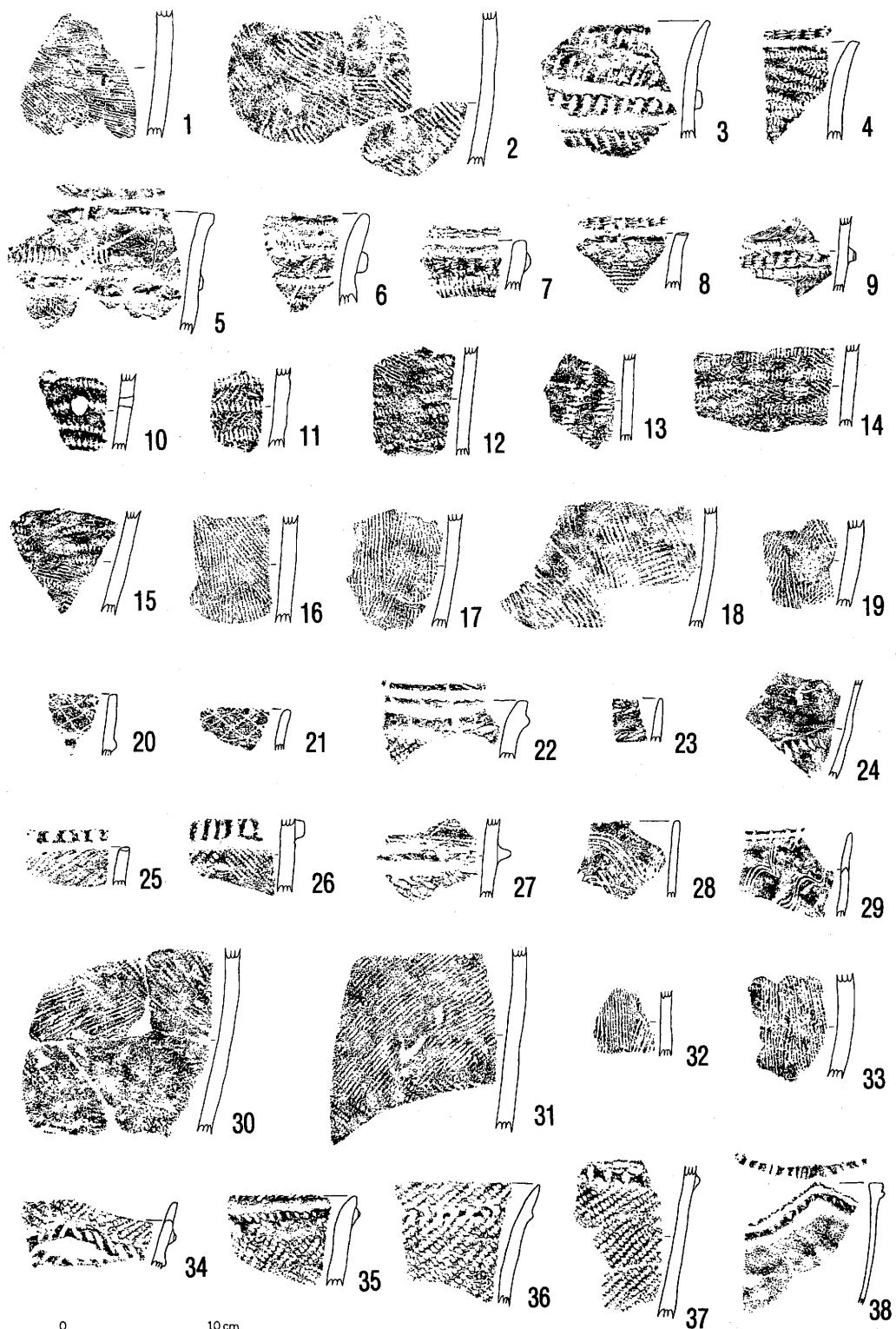
東海系土器群が供伴せず、郷土遺跡と同様に器面調整や捺糸文・縄文施文の点から石山～天神山式併行期と判断される。塚田遺跡では縄文地文の絡条体圧痕文（第9図1～5）・垂下隆帯を貼付する土器（6）・縄文地文の沈線文（7～12）が、川原田遺跡では縄文地文の絡条体圧痕文（13～21）・隆帯貼付の縄文施文土器（22）・縄文地文の沈線文（23・24）・縄文（25・26）・捺糸文（27）が、戻場遺跡では縄文地文の絡条体圧痕文（第11図6）が出土している。

梨久保遺跡23・75号住居址下層、坪ノ内遺跡は内容的に非常に類似し、捺糸文地文の絡条体圧痕文・工具の刻みあるいは絡条体を押捺した隆帯貼付の土器・縄文・捺糸文・絡条体条痕で構成され、縄文・捺糸文は安定して存在する。そこに石山式及び天神山式が伴うが、現状では両型式に併せた細分は行なえない。

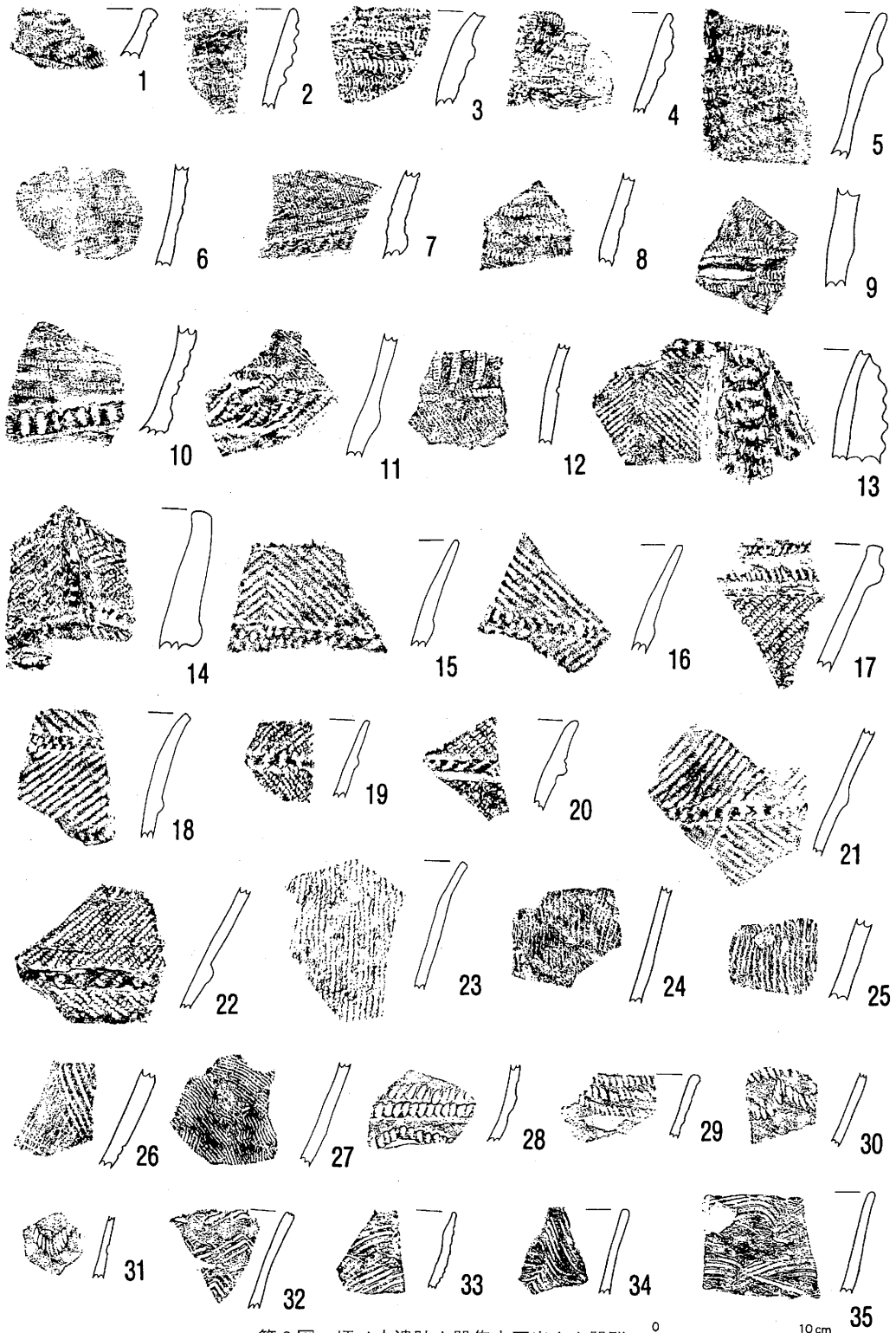
塚田遺跡・川原田遺跡・戻場遺跡では、梨久保遺跡・坪ノ内遺跡より絡条体圧痕文の縄文地文が卓越するものの、隆帯貼付の土器・縄文・捺糸文の構成は同様である。しかし、沈線文の有無については異なり、佐久方面への分布が指摘される沈線文が（中沢1997）、中南信地域の梨久保遺跡・坪ノ内遺跡では出土していない。下平博行氏は沈線文を、「大半が縦走もしくは縦走気味の縄文を地文とし、沈線により重弧・対弧・菱形などの幾何学的な構成をとり、口唇部には縄の押圧や断面が丸い工具による押圧が見られ、内面に条痕がなされるものもある。」と特徴付け、東北地方の影響下にある土器群と考えている（下平・賛田1994b）。また、中沢道彦氏は上述してきた土器群の一部を「プレ塚田式」と仮称し、その「プレ塚田式」に伴うと述べる（中沢1997）。下平氏の言う東北地方の影響とは、大畑G式を念頭に置いたものと思わ



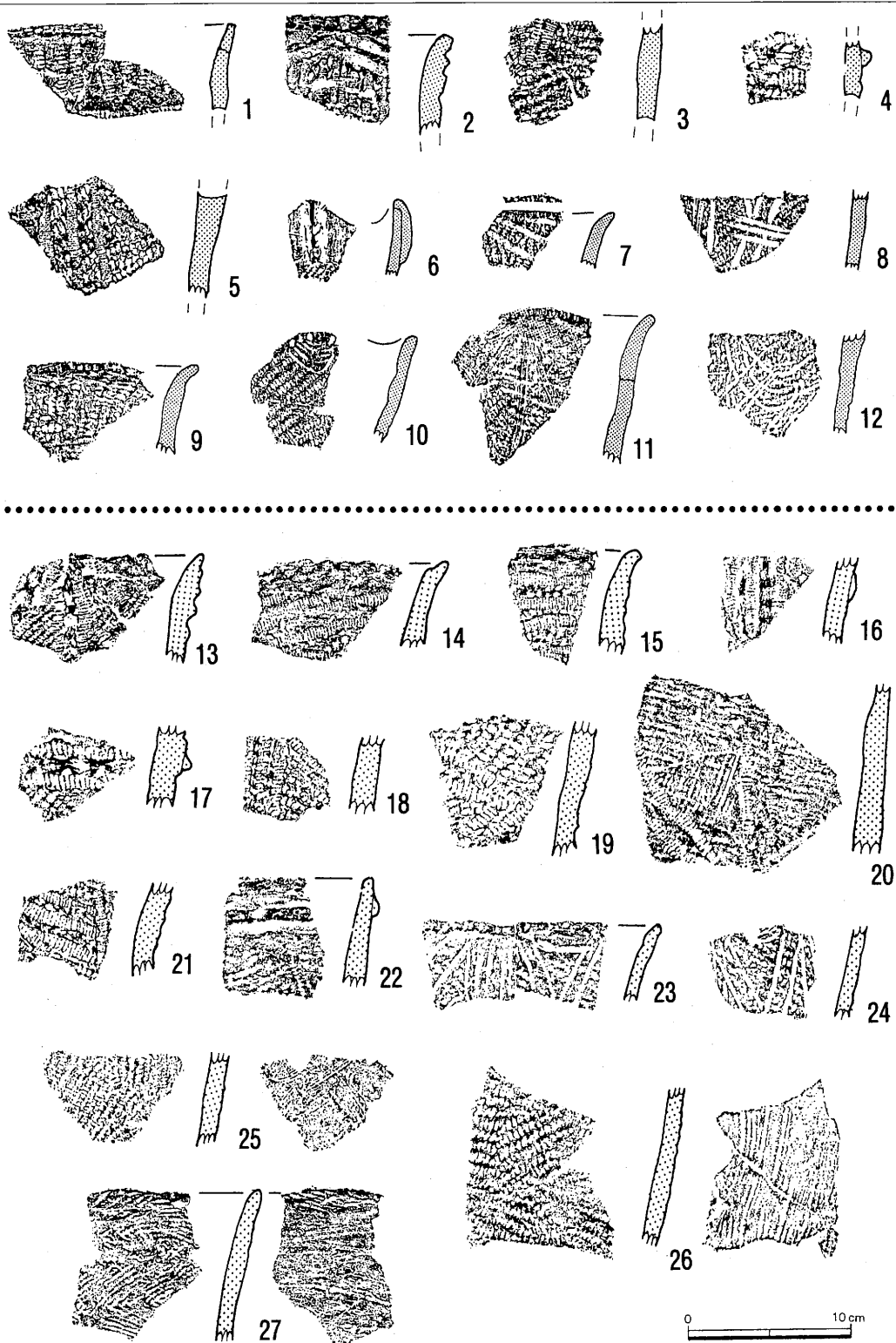
第6図 梨久保遺跡23号住居址出土土器群



第7図 梨久保遺跡75号住居址出土土器群



第8図 坪ノ内遺跡土器集中区出土土器群



第9図 塚田遺跡（1～12）・川原田遺跡（13～27）出土土器群

れ、佐久方面に集中する分布状況や文様構成に弧状を取り入れた状況は、その関連を示唆する可能性もあろう。しかし、郷土遺跡36号住居跡例（第1図5）と同様な文様構成は絡条体圧痕文土器群の中にも認められる。在地系の絡条体圧痕文土器群と東北系土器群の関係が問われる所であり、C類を検討する中でこの点に触れる。

(2) 既出資料との比較

続いて、郷土遺跡出土土器群と石山～天神山式併行期の類例を比較したい。郷土遺跡出土土器群の内、不明確なF類を除いたA～E類の検討を行なう。

A類の絡条体圧痕文（第2図23）は横位多段構成で、その構成自体は時間幅を持つが（中沢・賛田1996）、石山～天神山式併行期では増加する傾向にある（綿田2000）。縄文地文の良例が戻場遺跡で看取され（第11図6）、縄文LRの横位施文を基本としながら所々に斜位方向の施文を行い、部分的に崩れた羽状構成となる地文上の口縁部へ、3条の横位絡条体を押捺する。更に同一の絡条体によって、口唇部を刻む。内面は胴上半部に横方向、下半部には縦方向の、弱く部分的な絡条体条痕を施している。本類の内面には条痕が認められないが、部分的な条痕が施されていた可能性もあり、戻場遺跡例に近い様相を呈していた事が推測される。

B類の隆帯には、丸みを帯びた波状口縁の波頂部から垂下する隆帯（第2図24）と水平隆帯（25～39）があり、量的には1点を除き水平隆帯となる。

垂下隆帯は塚田遺跡に類例が存在するが（第9図6）、口唇部直下に無文部を形成している点が本例とは異なる。また、波状口縁の形態はC類と同様であり、この形態はB・C類を合わせると一定量が存在して、更に塚田遺跡でも認められる点から（第9図10・11）、石山～天神山式併行期の特徴的な波状口縁形態となろう。

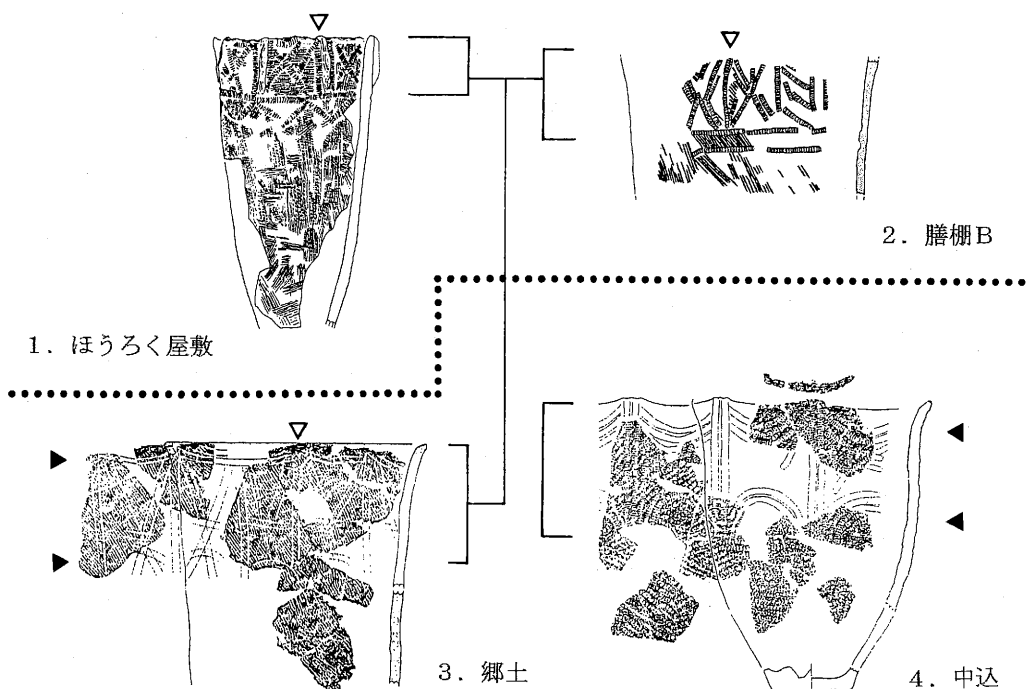
水平隆帯は工具で刻む例や隆帯の脇を沈線でなぞる例があり、刻みは梨久保遺跡23・75号住居址・坪ノ内遺跡に類例が求められ、更に坪ノ内遺跡では絡条体を押捺する例も看取された。工具の刻みと絡条体の押捺は原体の置換と理解でき、絡条体の押捺から工具による刻みへの転換が推測される。また、梨久保遺跡23号住居址では、工具で刻む隆帯が逆T字を形成し（第6図2）、当該期に少なくとも水平及び逆T字状の2種類の隆帯が存在した状況が窺われる。この隆帯は前期初頭塚田式と共通した構成で、後述するが縄文・撚糸文施文の一群と供に塚田式の成立母体となるものである。隆帯の脇を沈線でなぞる手法は、坪ノ内遺跡例（第8図20）と同様であり、下平博行氏は隆帯の隆起をより明確化する為に行い、隆帯上に絡条体を押捺する例にもその手法が見受けられると指摘する（下平・賛田1994b）。この手法は現状では塚田式に認められず、あるいは不明確で、早期末葉の手法として収まる可能性を持つ。なお、口縁部～胴部には横位斜構成・横位羽状構成・縦条の縄文が施文され、施文が隆帯上や内面の口唇部直下に及ぶ例もある。

C類は隆帯を持たず幅広の口縁部文様帯を形成する例と、隆帯で口縁部文様帯を区画する例が存在し、1点以外は全て前者である。幅広の口縁部文様帯を持つ例は波状口縁と平縁があり、波状口縁は波頂部が丸みを帯びる。横位施文の縄文や縦・斜位施文の撚糸文地文上に、平行・弧状・X字状等の幾何学的文様を沈線で描き、36号住居跡例（第10図3）等の文様を構成する

が、沈線は1条の場合と2条1対の場合がある。

沈線文については下平博行氏が東北地方の影響下にあると考えている点、36号住居跡例の様な文様構成が絡条体圧痕文土器群に存在する点を前述した。幅広の口縁部文様帯、逆を向く弧状等の文様を沈線で描く点、地文に撚糸文を施文する点は東北地方の大畑G式的だが、文様構成全体や内面条痕を持たない等の点で大畑G式そのものとは言えない。36号住居跡例の特徴は、撚糸文地文で口縁部文様帯に縦位区画を設定しX状の文様を描く点にあり、この構成が撚糸文地文の絡条体圧痕文土器群に認められる点を重視したい。

明科町ほうろく屋敷遺跡（綿田1996）例は（第10図1）、1条の横位絡条体圧痕文で設定された口縁部文様帯を、隆帯及び両脇の絡条体圧痕文で縦位に区画して、そこにX状の文様を配置する。また、文様帯を設定する横位絡条体圧痕文の下位には、鋸歯状の文様が見受けられる。膳棚B遺跡1号住居址例（2）はほうろく屋敷例とほぼ同様の構成を採り、縦位区画内にX状の文様を配置するが、横位区画が2条で鋸歯状の文様を持たず、文様帯の縦位区画に隆帯を用いない点が多少異なる。編年的位置は双方とも入海Ⅱ～石山式併行期とされ（中沢1994・1997）（綿田1996・2000）、中沢道彦氏はこの土器群をもって「膳棚B式」を設定した。縦位区画内にX状の文様を配置する例が、石山～天神山式併行期の直前、すなわち「膳棚B式」に認められる点が重要であり、絡条体圧痕文で構成する「膳棚B式」の文様を、石山～天神山式併行期では施文具を変えて沈線で描いたと考える。文様構成を「膳棚B式」（1・2）から引き継ぎ、「膳棚B式」の系統上に施文具を置換した郷土遺跡例（3）が位置するとの仮説である。



第10図 縦位区画とX状の文様

大畑G式の文様を受容したと推測される絡条体圧痕文土器が、山梨県中込遺跡（浅利1990）例である（4）。8単位の小波状口縁で、縄文LRの地文上に波頂部から縦位の絡条体圧痕文を施して8分割し、その上下には逆向きの弧状の絡条体圧痕文が巡る。綿田弘実氏は弧状の絡条体圧痕文を弧線文と称し、幅広の文様帯構成や弧線文の系譜を大畑G式に求めた（綿田1996）。中込遺跡例と郷土遺跡例は、文様帯幅や弧状の絡条体圧痕文（弧線文）を持つ点で共通する。しかし、逆向きの弧状や沈線文自体は「膳棚B式」に存在せず、郷土遺跡例は「膳棚B式」から引継いだ縦位区画やX状の文様に、東北系土器群の影響から弧状の文様を取り入れ、沈線で描いた可能性があろう。それに対して中込遺跡例は、大畑G式の沈線文を絡条体に変えて施文したものであり、絡条体圧痕文と沈線文における施文具の置換が、型式間で行なわれた結果を示している。

C類のもう一方である、口縁部文様帯を隆帯で区画する例（第3図52）は、平縁で1条の水平隆帯が区画する口縁部文様帯へ沈線で文様を描き、地文を持たない点が特徴である。隆帯下部は欠損する為、胴部に縄文・捺糸文が存在した可能性はある。構成的には前期初頭塚田式の、隆帯及び沈線を施す一群（第11図13・14）と類似し、極めて前期的と言えよう。

D類の縄文は波状口縁・平縁が存在するが、主体は平縁で口唇部を刻むものがある。縄文原体は全て単節であり、横位斜構成・異原体横位羽状構成が多く、縦条の縄文が一定量認められる。この傾向はA～C類の地文あるいは胴部の縄文も同様だが、B類に1点のみ無節が存在する（第2図24）。また、E類の捺糸文は波頂部が丸みを帯びた波状口縁が確認され、密接な捺糸文を横位・縦位・斜位方向に回転施文し、口唇部にも施文が及ぶ。捺糸側面圧痕文やRとL等の2本組の原体は、1点も存在していない。

縄文・捺糸文の傾向は上述の遺跡も同様で、横位斜構成・異原体横位羽状構成が主体となり、坪ノ内遺跡や塚田遺跡にも存在する縦条の縄文（第8図23、第9図9）が若干加わる状況は、そのまま石山～天神山式併行期における縄文施文の傾向として捉える事ができる。更に、RとL等の2本組の捺糸文や捺糸側面圧痕文が存在しない点も同様である。横位斜構成・異原体横位羽状構成・縦条の縄文は前期初頭塚田式へ引継がれ、早期末葉に不明確な縦長の菱形を構成する異方向施文や、捺糸側面圧痕文・RとL等の2本組の捺糸文が出現する。しかし早期末葉に縦条の縄文があつて、不明確だが郷土遺跡E類に縦長の菱形構成とともとれる捺糸文（第1図4）が認められる為、異方向施文が早期末葉から存在した可能性もある。

IV 早期末葉～前期初頭土器群の様相

郷土遺跡のA～E類は、各遺跡出土資料とともに石山～天神山式併行期の土器群の組成を示す。その動向を見ると、早期末葉で終息するものと次の前期初頭塚田式に繋がるものがあり、両時期の組成を示しながら早期末葉～前期初頭土器群の様相を比較する（第11図）。

○早期末葉石山～天神山式併行期（1～8）

絡条体圧痕文の一群・隆帯貼付の一群・沈線文の一群・縄文施文の一群・捺糸文施文の一群が存在する。

絡条体圧痕文の一群は、茅山下～上層式併行期以降継続してきたその最終段階となる。入海Ⅱ～石山式併行期（1・2）から引継ぐ撚糸文、本段階で出現する縄文を地文とし、立ち消えの隆帯及び横位多段の絡条体圧痕文を施す例（5）・幅狭の口縁部に横位多段構成の絡条体を施す例（6）・弧状の文様を施す例（7）等が見受けられる。

隆帯貼付の一群は逆T字状（3）・1条水平（4）の隆帯を貼付するが、隆帯幅や形態は多様で、絡条体で押捺あるいは工具で刻む例、隆帯の脇を沈線でなぞる例が含まれる。

沈線文の一群は縄文・撚糸文地文上に幅広の口縁部文様帯を設定して縦位区画を行い、弧状・X状等の文様を描く（8）。この文様構成は東北地方の影響を受けつつ、入海Ⅱ～石山式併行期における絡条体圧痕文（1・2）から引継がれる可能性がある。

縄文施文の一群は横位斜構成・異原体横位羽状構成が主体で、一定量の縦条の縄文が認められる。原体は単節だが、極僅かに無節も看取される。また、撚糸文施文の一群は横位・斜位・縦位方向の、密接した施文を行なっている。

○前期初頭塚田式（9～18）

御代田町塚田遺跡・下弥堂遺跡遺跡出土土器群が基準資料となり（下平・賛田1994a・b）、隆帯貼付の一群・隆帯及び沈線文を施す一群・隆帯及び撚糸側面圧痕文を施す一群・縄文施文の一群・撚糸文施文の一群が存在する。

隆帯を貼付する一群は塚田式の主体であり、平縁あるいは波状口縁に逆T字状（9～11）・1～2条水平（12）・緩やかな弧状等の隆帯を貼付する。隆帯幅や形態は多様で工具で刻む例も多いが、早期末葉で見受けられた絡条体で押捺する例は消滅し、隆帯脇を沈線でなぞる例も不明確である。

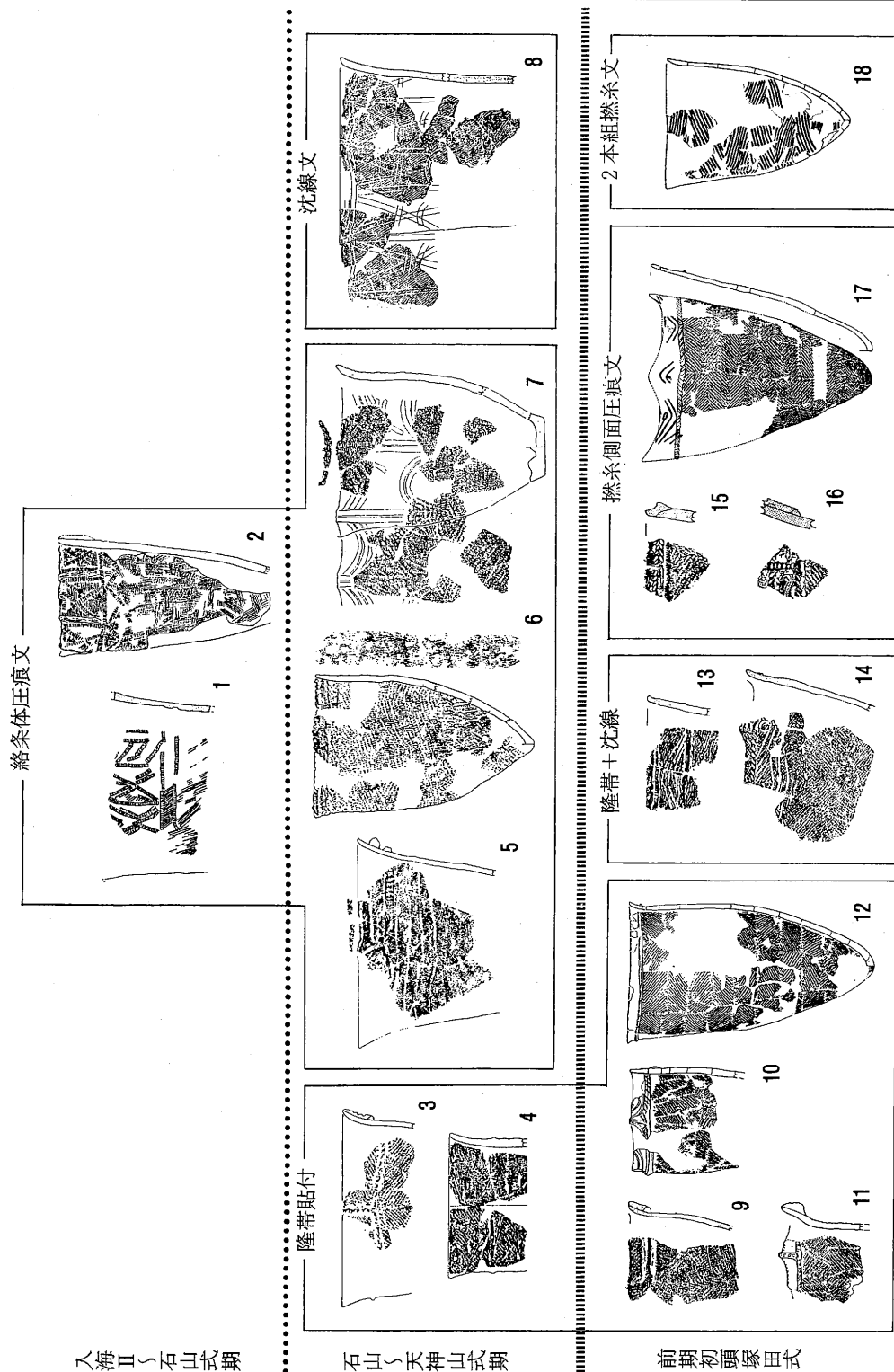
隆帯及び沈線を施す一群には、隆帯で区画された口縁部文様帯へ弧状の沈線を描く例（13）、逆T字状隆帯の下位へ弧状・渦巻状の沈線を描く例（14）等がある。弧状・渦巻状の文様は花積下層式と共通し、特に渦巻状の沈線は撚糸側面圧痕文を意識したものと推測される。

隆帯及び撚糸側面圧痕文を施す一群は、R・L2本組の撚糸文で直線状（15）・渦巻状（16）・弧状・渦巻状（17）の文様を構成する。

縄文施文の一群は0段多条の単節原体が多く、早期末葉と同様に横位斜構成・横位羽状構成・縦条の縄文があり、更に縦長の菱形を構成する異方向施文が加わる。また、横位羽状構成には菱形構成も目立っている。

撚糸文施文の一群はRとL等の2本組の撚糸文が出現して、横位・斜位・縦位方向の回転施文を行なう他、縦長の菱形構成や横方向の長い菱形状を構成する（18）。縦長の菱形構成は、縄文の異方向施文と関連する。

石山～天神山式併行期は縄文施文・沈線文等、東北系土器群の影響が在地系の絡条体圧痕文土器群に現れる事を前述したが、横位斜構成・異原体横位羽状構成・縦条の縄文等の縄文施文が多出し、更に隆帯を貼付する一群が見受けられる等、前期初頭土器群に通ずる要素が確立した状況が窺われ、これが塚田式の成立母体となる。塚田式の設定当時、早期末葉土器群との分離が課題であった。塚田式の主体である隆帯に関して言えば、早期末葉と前期初頭で非常に類



第二図 早期末葉～前期初頭土器群の変遷

似する為、分離が困難な例も存在するが、その隆帯に伴出する土器群は何かといった視点で観察すれば状況は明確である。

早期末葉は、絡条体圧痕文・隆帯貼付・沈線文・縄文・捺糸文で構成され、ここから塚田式に継承されるのは隆帯貼付・縄文・捺糸文であり、更に早期末葉には存在しない隆帯及び沈線文を施す一群・捺糸側面圧痕文・RとL等の2本組みの捺糸文が新たに加わっている。塚田遺跡の縄文を地文とする絡条体圧痕文・沈線文は、いずれも遺構外もしくは当該期の遺構出土で、塚田式基準資料との供伴はない。また、塚田式の沈線文は隆帯が区画する口縁部文様帯に描く点で、幅広の文様帯を持つ早期末葉とは異なり、そこに描く弧状・渦巻き状の文様は花積下層式・下吉井式と共通する。花積下層式の捺糸側面圧痕文による弧状・渦巻状の文様を、塚田式は原体を変えて沈線文で表現したと言えよう。こうした点から前期初頭塚田式は、絡条体圧痕文・沈線文が消滅して、隆帯貼付・隆帯及び沈線文を施す一群・捺糸側面圧痕文・2本組みの捺糸文が揃う段階で成立する。捺糸側面圧痕文・隆帯及び沈線文を施す一群は、塚田式の中にあって客体的で全ての遺跡・遺構で供伴するとは限らない。その意味では絡条体圧痕文と沈線文が消滅する点をより重視し、前期初頭と認識したい。

V 小 結

郷土遺跡出土土器群の検討を行いながら、早期末葉～前期初頭土器群の様相を検討したが、郷土遺跡出土土器群は、当地域における石山～天神山式併行期の様相を示す土器群で、類例で述べた遺跡とともに塚田式の成立母体になる土器群と評価された。その中で沈線文は、東北地方の影響を受けつつ、前段階の入海Ⅱ～石山式併行期に施文される絡条体圧痕文の文様を引き継いだ可能性が見受けられた。また前期初頭塚田式との区分は、捺糸側面圧痕文や隆帯及び沈線文を施す一群・2本組の捺糸文が出現して絡条体圧痕文・沈線文が消滅する点を重視してみた。当地域の土器群は、石山～天神山式併行期に東北地方の影響を受け、それを母体に前期初頭土器群が成立する。縄文施文尖底土器群はこれ以降、前期中葉に至る期間まで存続し(贅田1998)、尖底土器に拘る中部地方の地域性が発揮されるが、この過程は稿を変えて検討したい。

本稿を執筆するにあたり、絡条体圧痕文土器群については、中沢道彦・綿田弘実両氏による研究成果を参考とした。また、上田典男・川崎 保・関根慎二・谷藤保彦・百瀬長秀の各氏には多大なご教示を頂いた。お名前を記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- 阿部芳郎 1990『古屋敷遺跡発掘調査報告書』富士吉田市史編さん室
- 浅利 司 1990「絡条体圧痕文を有する土器について」『研究紀要』6 山梨県埋蔵文化財センター
- 小沢由加里 1986『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
- 金子直行 1989『下段遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子直行 2000「第13回縄文セミナー 当日資料」縄文セミナーの会
- 桜井秀雄他 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』19 長野県埋蔵文化財センター
- 島田哲男 1990『坪ノ内遺跡』松本市教育委員会

- 下平博行・賛田明 1994 a 「長野県に於ける縄文前期初頭縄文系土器群の編年」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 下平博行・賛田明 1994 b 『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- 縄文セミナーの会 1994 『第7回縄文セミナー 早期終末・前記初頭の諸様相』
- 縄文セミナーの会 1994 『第7回縄文セミナー 早期終末・前記初頭の諸様相』—記録集—
- 縄文セミナーの会 2000 『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』
- 谷藤保彦 1993 「群馬県内出土の早期末から前期初頭土器」『縄文時代』4 縄文時代文化研究会
- 谷藤保彦 1994 「群馬県における早期末・前期初頭の土器」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 中沢道彦 1994 「早期第IV群第2類土器について」『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- 中沢道彦・賛田明 1996 「長野県北佐久郡御代田町戻場遺跡採集の縄文土器について」『縄文時代』第7号 縄文時代文化研究会
- 中沢道彦 1997 「縄文時代早期末「膳棚B式」の設定と「プレ塚田式」の理解に向けて」『川原田遺跡 縄文編』御代田町教育委員会
- 賛田 明 1994 「前期初頭の土器について」『下弥堂遺跡』御代田町教育委員会
- 賛田 明 1998 「縄文前期中葉の尖底土器について」『信濃考古』155 長野県考古学会
- 翠川泰弘 1988 『鍛冶屋遺跡』東部町教育委員会
- 百瀬忠幸 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』1 〔長野県埋蔵文化財センター〕
- 綿田弘実 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』12 〔長野県埋蔵文化財センター〕
- 綿田弘実 1996 「中央高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館研究紀要』2 長野県立歴史館
- 綿田弘実 2000 「長野県の縄文早期末葉土器群」『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』縄文セミナーの会